

欲求の構造に関する研究

— 欲求階層理論検証の 1 つの試み —

山 田 克 子

問題と目的

Maslow, A. H. (1954) は、人間に普遍的な基本的欲求を考え、それらが階層 (hierarchy) 構造をなしているとした。すなわち、最底辺に生理的欲求が位置し、それから順に上へと、安全の欲求、愛と所属の欲求、承認の欲求、そして頂点に自己実現の欲求が位置している。

この欲求階層理論はその後の多くの研究に影響を与えたにもかかわらず、その理論を忠実に検証しようとしたものはほとんどない。

そこで本研究では、上の Maslow の 5 つのカテゴリーの欲求に関して、欲求間の関係を検討していきたいと考える。欲求充足度と欲求強度を 2 つの指標とし、上の 5 つの欲求の充足度を (P), (S), (L), (E), (A) で表わし、強度を P, S, L, E, A で以下表わすことにする。

Alderfer, C. P. (1969) が命題として明確にした、frustration が motivation をもたらすこと、frustration が regression をもたらすこと、そして satisfaction が progression をもたらすことの 3 点を、この 5 カテゴリーにも応用してみたいと考える。これらは、Maslow 理論にも、莫然としてではあるが含まれているものと思われる。しかし本研究では、Maslow 理論の、低次欲求の満足が高次欲求出現の必要十分条件であるとしている点をも含めて、検討していくつもりである。

研究 I では、欲求充足度と欲求強度をめぐって、主に各カテゴリー間の関係についてみていきたい。研究 II では、発達の視点をとり入れ、欲求の相対的重みの変化についてとり上げていきたいと考える。

予備研究

Maslow に基づいた 5 つのカテゴリーの欲求に関し、その充足度とその強度を測定する質問紙を作成した。予備調査 I・2 を経て、内容的妥当性及び内部一貫性といった点に留意して、項目が選択された。そして、欲求充足度を測定する質問紙「調査 NGQ-74」と欲求強度を測定する質問紙「調査 NIQ-74」の項目及び形式が最終的に決定された。

研究 I

目的

Maslow の 5 つのカテゴリーを用いて、各カテゴリーの欲求充足度及び欲求強度に注目し、カテゴリー間に如何なる関係が認められるかについて分析する。

方法

被験者：男子大学生 284 名

質問調査用紙：「調査 NGQ-74」及び「調査 NIQ-74」(以下、それぞれ NGQ, NIQ と省略して表わす)

結果

1) 各項目とカテゴリーについて

NGQ, NIQ それぞれについて、全 30 項目 (6 項目 \times 5 カテゴリー) の項目間相関を求めたところ、低次の (P)(S) 及び P カテゴリーの項目は、互いに比較的独立した関係を示すのに比べ、(L)(E)(A) 及び S L E A カテゴリーは同一カテゴリー項目間の相関が一様に皆高い。また各カテゴリー得点 (合成得点) の α 係数は、比較的妥当な値を示しており、予備研究を経て作成されたこれら質問紙は、不十分ながらも一応以後の分析に耐え得るものであることが、ここでも確認された。

2) 欲求充足度について

NGQ によって測定した欲求充足度について、ここでは 5 つのカテゴリー得点に注目して、カテゴリー間の関係について分析した。5 つのカテゴリー間の相関を求めると、各カテゴリーは相互に正の相関関係にあり (これらの値はすべて 0.1% 水準で有意)、しかも隣り合った欲求カテゴリー間の相関 (P) と (S), (L) と (E), (E) と (A) はとくにその値が高い傾向を示していた。

さらに、この 5 つのカテゴリーの欲求充足における順序性について検討するために、Guttman, L. の尺度解析 (Scalogram analysis) を施し、一次元の尺度をあてはめる試みをした。各カテゴリー得点を中間点の 16 点で二分し、充足と不充足とに分割して行なった。その結果、当初仮定された順序 A(E)(L)(S)(P) においては、0.784 という再現性係数を示し、厳密な一次元尺度とはむろんいえないが、ある程度の一次元性は、仮定された順序においてみられることが示された。

3) 欲求強度について

NIQ の 5 つのカテゴリー得点に注目し、カテゴリー

欲求の構造に関する研究

間の関係について分析した。5つのカテゴリー間の相関をみると、相互に完全に独立ではないが、NGQでみられたような高い値は示さず、しかも負の関係にあるものもみられた。

次に各被験者の5つのカテゴリーへの反応パターンに注目してみると、Aが強い者が多く、またPとLがAとともに強い者がかなり存在した。

4) 欲求充足度と欲求強度との関係について

ここでは、NGQとNIQの各カテゴリー得点間の関係について検討した。これらの相関は表1に示したとおりである。当初予測したように、行列の右上側すなわち

表1 欲求充足度と欲求強度の相関

強度 充足度	P	S	L	E	A
(P)	-.035	-.035	-.003	.157**	.112*
(S)	-.114*	-.050	.200**	.160**	-.066
(L)	-.005	-.071	.134*	.174**	.039
(E)	-.079	-.168**	.046	.266**	.120*
(A)	-.048	-.081	-.039	.053	.158**

注 (*) $P < .10$, * $P < .05$, ** $P < .01$

低次の欲求充足度と高次の欲求強度とは正の相関を多く示し、左下側すなわち高次の欲求充足度と低次の欲求強度とは負の相関を多く示す傾向がみられた。しかし対角線上にある同一カテゴリーの充足度と強度の相関は、予測に反し、LEAの高次3カテゴリーでは正の相関を示した。

また、NIQの最高カテゴリー得点に注目して分類した各NIQタイプのNGQ得点についても検討してみた。NIQタイプの典型例のみとり出し、類型とNGQカテゴリーを2要因として分散分析(処理×処理×被験体)をした結果、2要因の交互作用が、5%水準で有意であった。

5) 5カテゴリーの有効性をめぐって

— NGQとNIQの因子分析による検討 —

NIQの全30項目について、Pearsonのrによる相関行列をもとに、完全セントロイド法により因子分析を行ない、予め指定した数の5因子を抽出した。そしてさらにこの解をバリマックス回転して単純構造を求めたところ、これら5因子は、NIQにおいてあらかじめ設定した5カテゴリーと、かなり対応することが明らかにされた。

NGQについては、Pearsonのrの相関行列から、主因子解により5つの因子まで抽出した後、直接オブリミン法により斜交回転を行なった。その結果、第V因子についてはあまり明瞭ではないが、他の4因子は、(S)を除く4カテゴリーと対応している。なお第V因子も、因子構造、因子パターンをみると、(S)カテゴリー項目と対応し

ている部分もかなり見られた。また因子間相関についても、2でみられたカテゴリー間相関と同様の傾向が示された。

研究II

目的

ここでは発達の視点にたつて、欲求階層理論について、更に検討していく。

方法

被験者：男子大学生275名(研究Iのデータ中NIQについての有効数)。男子高校生117名。男子中学生46名。

質問調査用紙：「調査NIQ-74」

結果

大学生、高校生、中学生のNIQカテゴリー得点を比較すると、年齢が進むにつれて、Aが相対的に高くなっていくことがみられる。これを分散分析すると、年齢とNIQカテゴリーとの相互作用が有意であった。また、NIQ類型における3群の度数についても検討したが、差異がみられることが示された。これらより、Aは、年齢が増すにつれて相対的に強くなることが認められる。

総括的討論：結論と今後の問題

因子分析を用いて、Maslowのカテゴリーを検討した従来の研究とは異なり、本研究では、カテゴリーにかなり対応する因子が抽出された。これにより、この5カテゴリーは、少なくとも不適切な分類ではないと解釈することができよう。

そして、欲求充足度と欲求強度との相関あるいは充足度のカテゴリー間相関などから、階層構造をかなり支持する傾向がみられた。ただし、それはさらに大きく2つに分類し得る二層性の階層を示唆するものでもあった。

さらに、年齢が上昇するにつれて、高次欲求が相対的により大きな意味をもってくるのがうかがわれ、心理的発達の相違により、欲求の相対的重みに変化するものであることも示唆された。

しかしこうした階層は、各個人にそのままあてはまるというわけではなく、大まかな傾向としてみられるものであって、階層はそれほどrigidなものではないといえよう。

本研究では、大まかな傾向を把握するという位置づけのもとに、質問紙調査という方法によったが、こうした測定をめぐると方法論的問題は大きなものとしてあげられよう。外的基準などをとり入れる方向も必要であるし、一方では、TATなどをも用い、無意識レベルにまで掘り下げていく必要があると思われる。